



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第21回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

誤解から和解へ

もう二〇年も前のことです。アメリカの田舎町で臨時牧師をしておりました。人口一五〇〇人というほんとに小さな町で、日本人を見たのは戦争後をはじめで、という人はかりでした。

ある日の礼拝後、くつろいだ雑談がいつのまにか戦争の話になり、何げなく「日米開戦は十二月八日だ」と言いますと、居合わせた

人々が一斉に「やっぱりそうか」と大騒ぎになってしまいました。「日本ではそこまで嘘を教えているのか」と言うのです。

はじめわたしは、何の事やらさっぱりわかりませんでした。皆さんずでおわりのように、日本の八日早朝は、ハワイではまだ七日です。単に時差による日付の違いにすぎないのですが、それが彼らのうちにある「開戦前に行われた卑怯な真珠湾攻撃」というイメージを上塗りする誤解を生んでしまったのです。わたしはその時、アメリカの田舎に住むごく普通のまじめなクリスチャンが「日本人」をどう見ているか、ということに悟りました。誰しも誤解されることは好みませんが、それで見えてくることもあります。解釈学者のデイルタイは、「人間の幸福の大部分は他人の心を理解することにある」と言いました。どんなに強欲な守銭奴でも、どんなに自分勝手なエゴイストでも、実は心の奥底でこのこ

とをちゃんと知っています。他者との意味ある関係の中に生きてこそ、わたしたちは心からの幸福を感じることができるのです。

しかし、そうであるからこそまた、わたしたちは人との関係の中で深く傷つきます。中には、けっして人とぶつからず、いつでも誰とも仲良くやってゆける、という人もいますでしょう。けれども、わたしたちの大部分は、自分の苦手なあの人この人と、何とかうまくやってゆく方法はないものか、と日々悩んでいるのではないのでしょうか。

人との関係がこじれた時、わたしたちが思うのは、「あの人のここが変わってくれたら」ということです。ということは、きつとその相手もわたしについて何かしらそう思っている、ということでしょう。よく「自分のことは棚に上げて」と言いますが、わたしたちは自分のことは自分でよく理解できないものです。すると、お互いが「相手こそ変わるべ

人との関係がこじれた時、わたしたちが思うのは、

「あの人のここが変わってくれたら」ということです。

ということは、きつとその相手もわたしについて何かしら

そう思っている、ということでしょう。すると、

お互いが「相手こそ変わるべきだ」と思うだけで、

ちつとも関係改善は進まないことになってしまいます。

わたしたちはどこかで、以前とは違う光の下で、

自分を見る必要があります。

「きだ」と思うだけで、ちつとも関係改善は進まない、ということになってしまいます。わたしたちはどこかで、以前とは違う光の下で、自分を見る必要があります。

キリスト教徒の迫害に息をはずませていたパウロは、ダマスコ途上で突然「天からの光」に照らされます。彼は地に倒れ、呼びかけてくる声に尋ねました。「主よ、あなたはどなたですか」。それに対してイエスはこうお答えになっています。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」(使徒9・5)。

注意して見てください。ただ「わたしはイエスである」ではありません。「あなたが迫害しているイエス」です。「わたしが誰であるか」は、「あなたが誰であるか」と無関係

には答えられない、ということでしょう。

パウロはそこではじめて、自分のしてきたことを悟ります。それまで「我を忘れて」行ってきたことに、気がつくのです。ここには、パウロの新しい自己理解が芽生えています。彼はそこではじめて、相手のことばかりでなく、自分のことも新たな目で見るできるようになります。相手を見いだすのと同時に、その相手とのかかわりの中にある自分をも見いだしているのです。

「天からの光」が見せてくれるのは、そういう自分です。孤立した自分、自分一人です。分であるような自分ではなくて、相手との交わりの中にある自分、相手とのかかわりの中で、はじめて誰であるかがわかるような自分

です。そのような自分を知った時、わたしたちは和解への糸口をつかみます。

クリスマスのメッセージは、人が人と和解し、人が神と和解する、ということです。人は皆、和解したがついています。仲直りしたいのです。誰も、人とけんかしたままでいたいとは思いません。でも、なかなかその一歩が踏み出せないのです。それは、わたしたちに相手が見えていないだけでなく、自分自身も見えていないからではないでしょうか。そのようなわたしたちのために、「すべての人を照らすまことの光」が世に來られました。

わたしたちには、和解が必要です。そして、わたしたちが和解を必要としている究極の相手は、神です。神の諸教会を巡り歩いてキリスト教徒を迫害していたパウロが必要としていたのも、神との和解でした。その究極の相手と和解することで、はじめて人々との和解も可能となりました。その和解こそが、イエス・キリストにおいて差し出される十字架の福音です。

人との交わりの中で傷つき苦しむわたしたちですが、どうかクリスマスの光に照らされて、それまで気づかなかった新しい自分を発見し、神と人との和解の中に生きることができますように。

え？ 何？ 十二月八日は「ジョン・レノン記念日」だと思ってた？